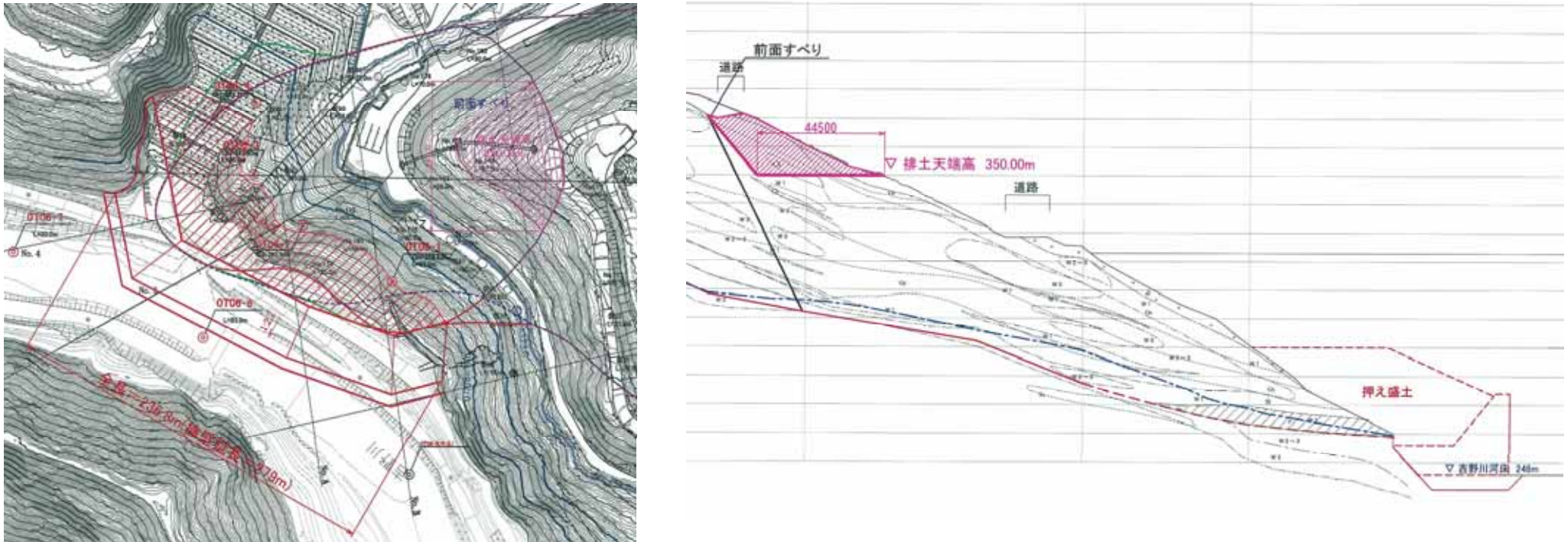


§2 大滝地区貯水池斜面对策の検討

事 項	要 点	備 考																								
<p>2-4 工法工種の選定</p> <p>2-4-1【1次選定】</p> <p>抑制工, 抑止工の工種選定</p>	<div data-bbox="587 275 2309 422" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・大滝地区の対策工として、比較の検討対象となる工種・工法の選定を行った。 ・抑制工としては、すべり面の位置や確実性から、「押え盛土工」が適切である。 ・抑止工としては、大滝地区での施工性を考慮し「鋼管杭工」と「深礎杭工」が考えられる。 </div> <p>・一般に、地すべり対策工は抑制工(押え盛土工、排土工、地下水排除工等)と抑止工(鋼管杭工、アンカー工、深礎杭工等)に大別される。 当地区地すべりブロックの対策工の適否を下表にとりまとめる。</p> <p style="text-align: center;">表 2-4-1 大滝地区対策工検討(1次比較)</p> <table border="1" data-bbox="676 657 2407 1608"> <thead> <tr> <th colspan="2">工法・工種</th> <th>適用性</th> <th>評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">抑制工</td> <td>押え盛土工</td> <td>地すべりの末端部に盛土を施工して抵抗を付加し、地すべり地全体の安定化を図る工法である。 すべり面が河床部付近に達しているため、末端部に施工すれば効果的であり確実性が高い。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>排土工</td> <td>地すべり頭部の土塊を排除して安定化を図る工法である。 前面すべりの背後にあるすべりにおいて安全率の低下が懸念される。また、現道にも影響を与える。</td> <td>×</td> </tr> <tr> <td>地下水排除工</td> <td>地すべり土塊内の地下水を排除して安定化を図る工法である。 すべり土塊内に地下水がほとんど存在しないこと、すべり端部が湛水影響範囲内であることから、効果が小さいものと思われる。</td> <td>×</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">抑止工</td> <td>鋼管杭工</td> <td>大口径ボーリングを削工した後、鋼管を建て込み、その抵抗力で地すべりの滑動を抑止する工法である。 抑止効果が打設方向にあまり影響されない。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>深礎杭工</td> <td>深礎杭工は井戸を掘削したあとで、鉄筋コンクリートを打設して、その抵抗力で地すべりの滑動を抑止する工法である。 施工進捗を考慮し発破等を使用する場合には騒音・振動が大きくなり、周辺環境への影響が懸念される。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>アンカー工</td> <td>鋼材によってプレストレスを付加して、すべり面のせん断抵抗力を増大させたり、鋼材の引張りの強さにより地すべりの滑動を抑止する工法である。 すべり土塊が尾根状であり、必要なアンカーの延長が60mと長くなる。また、アンカーを配置するための受圧板台座調整等、施工性に難がある。</td> <td>×</td> </tr> </tbody> </table>	工法・工種		適用性	評価	抑制工	押え盛土工	地すべりの末端部に盛土を施工して抵抗を付加し、地すべり地全体の安定化を図る工法である。 すべり面が河床部付近に達しているため、末端部に施工すれば効果的であり確実性が高い。		排土工	地すべり頭部の土塊を排除して安定化を図る工法である。 前面すべりの背後にあるすべりにおいて安全率の低下が懸念される。また、現道にも影響を与える。	×	地下水排除工	地すべり土塊内の地下水を排除して安定化を図る工法である。 すべり土塊内に地下水がほとんど存在しないこと、すべり端部が湛水影響範囲内であることから、効果が小さいものと思われる。	×	抑止工	鋼管杭工	大口径ボーリングを削工した後、鋼管を建て込み、その抵抗力で地すべりの滑動を抑止する工法である。 抑止効果が打設方向にあまり影響されない。		深礎杭工	深礎杭工は井戸を掘削したあとで、鉄筋コンクリートを打設して、その抵抗力で地すべりの滑動を抑止する工法である。 施工進捗を考慮し発破等を使用する場合には騒音・振動が大きくなり、周辺環境への影響が懸念される。		アンカー工	鋼材によってプレストレスを付加して、すべり面のせん断抵抗力を増大させたり、鋼材の引張りの強さにより地すべりの滑動を抑止する工法である。 すべり土塊が尾根状であり、必要なアンカーの延長が60mと長くなる。また、アンカーを配置するための受圧板台座調整等、施工性に難がある。	×	<div data-bbox="2472 489 2828 573" style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>大滝地区貯水池斜面对策検討委員会 (第一回委員会)より</p> </div> <div data-bbox="2472 590 2828 705" style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <p>抑制工で安全率 1.05 を確保することを目標とし、安全率 1.05 以上(1.15 まで)については、抑止工も視野に入れて対策工の検討を行う。</p> </div>
工法・工種		適用性	評価																							
抑制工	押え盛土工	地すべりの末端部に盛土を施工して抵抗を付加し、地すべり地全体の安定化を図る工法である。 すべり面が河床部付近に達しているため、末端部に施工すれば効果的であり確実性が高い。																								
	排土工	地すべり頭部の土塊を排除して安定化を図る工法である。 前面すべりの背後にあるすべりにおいて安全率の低下が懸念される。また、現道にも影響を与える。	×																							
	地下水排除工	地すべり土塊内の地下水を排除して安定化を図る工法である。 すべり土塊内に地下水がほとんど存在しないこと、すべり端部が湛水影響範囲内であることから、効果が小さいものと思われる。	×																							
抑止工	鋼管杭工	大口径ボーリングを削工した後、鋼管を建て込み、その抵抗力で地すべりの滑動を抑止する工法である。 抑止効果が打設方向にあまり影響されない。																								
	深礎杭工	深礎杭工は井戸を掘削したあとで、鉄筋コンクリートを打設して、その抵抗力で地すべりの滑動を抑止する工法である。 施工進捗を考慮し発破等を使用する場合には騒音・振動が大きくなり、周辺環境への影響が懸念される。																								
	アンカー工	鋼材によってプレストレスを付加して、すべり面のせん断抵抗力を増大させたり、鋼材の引張りの強さにより地すべりの滑動を抑止する工法である。 すべり土塊が尾根状であり、必要なアンカーの延長が60mと長くなる。また、アンカーを配置するための受圧板台座調整等、施工性に難がある。	×																							

§2 大滝地区貯水池斜面对策の検討

事項	要点	備考
<p>2-4-1【1次選定】 抑制工,抑止工の工種選定</p>	<p><u>排土工の課題</u>：前面すべりの背後において、安全率の低下が懸念される。 また、現道にも影響を与える。</p> 	
	<p><u>アンカー工の課題</u>：すべり土塊が尾根状であり、必要なアンカーの延長が60mと長くなる。 また、アンカーを配置するための受圧板台座調整等、施工性に難がある。</p> 